



第 149 号

二〇一七年二月二四日発行
発行者 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者 水野敏典

宮滝遺跡出土の宮滝式土器の紋様と砂礫

奥田 尚

一 はじめに

吉野郡吉野町宮滝の河岸段丘で縄文時代晩期の宮滝式土器が出土している。この資料は吉野町の宮滝資料館で保管され、一部が同館で展示されている。吉野町教育委員会の許可を得て、展示されている二三点の資料の紋様と表面の砂礫を観察した。観察した資料は土器の破片であり、土器の個体数を示すものではない。しかし、土器製作時に使用されている砂礫の類型数は最少限の土器の個体数を示すと考えられる。この推定に基づけば、観察した二三資料の土器片は四類型八亜類型に区分され、砂礫の採取地が少なくとも六地点以上の土器の破片である。宮滝遺跡付近の砂礫構成を示す土器は僅か三破片で、他の破片は領家花崗岩類が分

布する地の砂礫構成を示す。紋様と砂礫の観察結果について述べる。

二 紋様について

宮滝式土器には巻貝の押形紋がある。この紋様はタニシやツメタガイのような円みをもつ巻貝ではなく、カラーコーンのような細長い巻貝の先端を中心として弧状に押し付けたような紋様である。紋様は扇形を呈し、弧を描くように太い線とその中に細い線が入る。弧状をなす線は殆どものにみられ、明瞭なものや不鮮明なものがある。また、弧状の線に斜交する並行線が部分的にみられるもの、不鮮明な網目模様を斜交するものがある。弧状の線のみが認められるものをAタイプ、弧状の線と斜交する線が認められるものをBタ

次 目

宮滝遺跡出土の宮滝式土器の紋様と砂礫
松林苑と奈良時代の築地(上)
海外交流
附属博物館展示案内

奥田 尚 1
須藤 好直 4
編 集 部 8
編 集 部 8

イブ、弧状の線と網目の模様が交差するものをCタイプの模様とした。

三 砂礫構成について

Bタイプとした弧状の線に斜交する並行線は弧状の線がある部分全体にあるのではなく、扇形の左右端部の両方あるいは一方にあり、中心線部には殆どみられない。また、斜交する線は扇形端部の方向と並行する場合が多い。これらのことから紋様を付けた原体にある線であれば、弧状をなす線に直交して、扇形の紋様全体に扇の軸のようにつくだろう。Bタイプとした紋様の斜交する線は、中心線部にはなく、端部付近にみられ、端部の方向と並行し、扇形の横線と斜交するものが多いことから、紋様をつけた時の静止痕のようなものではないだろうか。また、弧状の中心となる先端部分は一点ではなく、二点以上に移動している場合が多く、それに伴ったような縦線であるようにもみられる。弧状の線がつくような原体には二ナのような貝殻が推定される。

砂礫の観察には倍率が二〇倍の実体顕微鏡を使用し、砂礫を観察しやすい部分で行った。砂礫の一部に赤色顔料(辰砂の粉)が付着している資料(登録番号1258、1261)もあった。砂礫種構成を基に識別した砂礫を類型に区分すれば、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするI類型、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とするII類型、斑礫岩質岩起源と推定される砂礫を主とするIII類型、片岩起源と推定される砂礫を主とするIV類型になる。更に、副となる少量の砂礫をもとに細区分すれば、観察した二三点は、I類型がIb類型(五点)、Ibd類型(三点)、Id類型(一点)に、II類型がIIa類型(四点)に、III類型がIIIa類型(七点)に、IV類型がIvd類型(一点)、VII d n類型(一点)、VIII h類型(一点)になる。更に、砂礫の形状と量を加味すれば、II類型は、角閃石に柱状のものが多く、黒雲母

表1 宮滝式土器の表面にみられる砂礫

資料番号	器種	石										物										種類と砂礫の採取推定地		
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		片岩		火山ガラス		石英		長石		雲母		角閃石		輝石				
		裸眼	20倍	裸眼	20倍	裸眼	20倍	裸眼	20倍	裸眼	20倍	裸眼	20倍	裸眼	20倍	裸眼	20倍	裸眼	20倍	裸眼	20倍			
1231	鉢	L稀	L-僅									M僅	L-中	L-中	L-僅	L-中			M微				I b類型	樫原付近
1232	鉢	L稀	L-僅									L-中	M-中	L-中	L-稀	L-僅			M微				I b類型	樫原付近
1233	鉢	L稀	L-稀									M微		M-僅		M中	L-多	L-中			M-稀		II a類型	大川付近?
1234	鉢									M多			M微										VI h類型	宮滝付近
1235	鉢	L僅	L-微									M-微	L-僅	L-僅	L-僅	M-微	L-中		M微				I b類型	樫原付近
1238	鉢		L-微									M中	M-微	L-稀		M稀		M-稀					I bd類型	沢付近
1239	鉢	L-稀	L-中									L-僅	L-中	L-微	M-僅	L-微	M-稀	L-稀					I bd類型	沢付近
1240	鉢		M稀									M稀	L-中	L-僅				M中	M-多		M-中		III a類型	名張付近?
1241	鉢		M微									M僅		M僅		M微		L-中					II a類型	河内恩智付近
1242	鉢		L-多						M稀			L僅		L-僅	M-微	L-微		M-稀					I b類型	花崗岩類分布地
1243	鉢		L-中									M僅	L-中	M僅	M微		M稀	S微					I bd類型	沢付近
1244	鉢		L-僅									L-中	L-中	L-中				L-中	L-非				III a類型	名張付近?
1245	鉢		L-微	L稀								M僅	M-僅	M微	S微	M多	L-多	L-中					II a類型	河内恩智付近
1246	鉢					M-僅			L-多													M稀	VI d類型	宮滝付近
1247	鉢	L-僅	L-僅			L稀						L-僅	L-僅	L-僅	M-僅	L-稀							I d類型	花崗岩類分布地
1248	鉢		L稀									M-僅	L-微	M-僅		M-微	L-中	L-多			M僅		III a類型	名張付近?
1249	鉢					M稀			L-多			M-稀											VI d類型	宮滝付近
1250	鉢		L稀									M-僅	L-微	L-微		M-微	L-多	L-中	L-中				III a類型	名張付近?
1252	鉢		L-微									L-中	L-僅	M僅	M中	L-僅		M-微					I b類型	樫原付近
1258	鉢	L稀	L-微									M-僅	L-中	L-中	M微		L-僅	L-中					III a類型	名張付近?
1261	鉢	L稀	L-微									M僅	M-中	M中		L-僅	L-多	L-中			M稀		II a類型	大川付近?
1261	鉢	L稀	L-微									M微	L-僅	L-僅			L-僅	M僅			L-中		III a類型	名張付近?
1261	鉢	L稀										M微	L-中	M微		L-微	L-多	L-多			M僅		III a類型	名張付近?

裸眼 = 裸眼観察 裸眼による観察 : L = 粒径が2 mm以上 M = 粒径が2 mm未満0.5 mm以上 S = 粒径が0.5 mm未満 20倍 = 実体顕微鏡の倍率が20倍 実体顕微鏡による観察 : L = 粒径が1 mm以上 M = 粒径が1 mm未満0.3 mm以上 S = 粒径が0.3 mm未満 非 = 量が非常に多い 多 = 量が多い 中 = 量が中 僅 = 量が僅か 微 = 量がごく僅か 稀 = 量がごくごく僅か - = 以下の粒径がある フ = フジツボ状 類型区分は奥田の区分 (1992) 『庄内式土器研究 II』を参照。

が少ないもの(二点)と、角閃石が粒状で、黒雲母が目立つもの(二点)に区分される。このように砂礫の相を加味すれば砂礫の採取地は更に増加し、六地点以上となる。

四 砂礫の採取推定地について

土器が出土した宮滝の段丘は吉野川の川原の砂礫と同じ砂礫層からなるが、山地近くになれば結晶片岩が風化した粘土混じりの土となり、結晶片岩が砕けた砂礫が含まれる。また、当地の宮滝の滝をなす部分は石英斑岩の岩脈である。このような流紋岩質の岩石が風化した砂礫も場所により含まれることがある。吉野川(紀ノ川)流域には主として結晶片岩が分布し、花崗岩や閃緑岩、斑礫岩は吉野川と木津川・淀川の間分布する領家花崗岩類が分布する地まで行かなければ分布を見ない。木津川・淀川以北には丹波帯の頁岩や砂岩を主とする丹波層群が分布する。観察した結晶片岩の砂礫を含む三点の土器片は宮滝付近の砂礫と推定されるが、他の二〇点の砂礫は吉野川の北側にある尾根を越えた大阪府から奈良県を経て、三重県に続く領家花崗岩類が分布する地の砂礫と推定される。更に、地域的な砂礫構成の

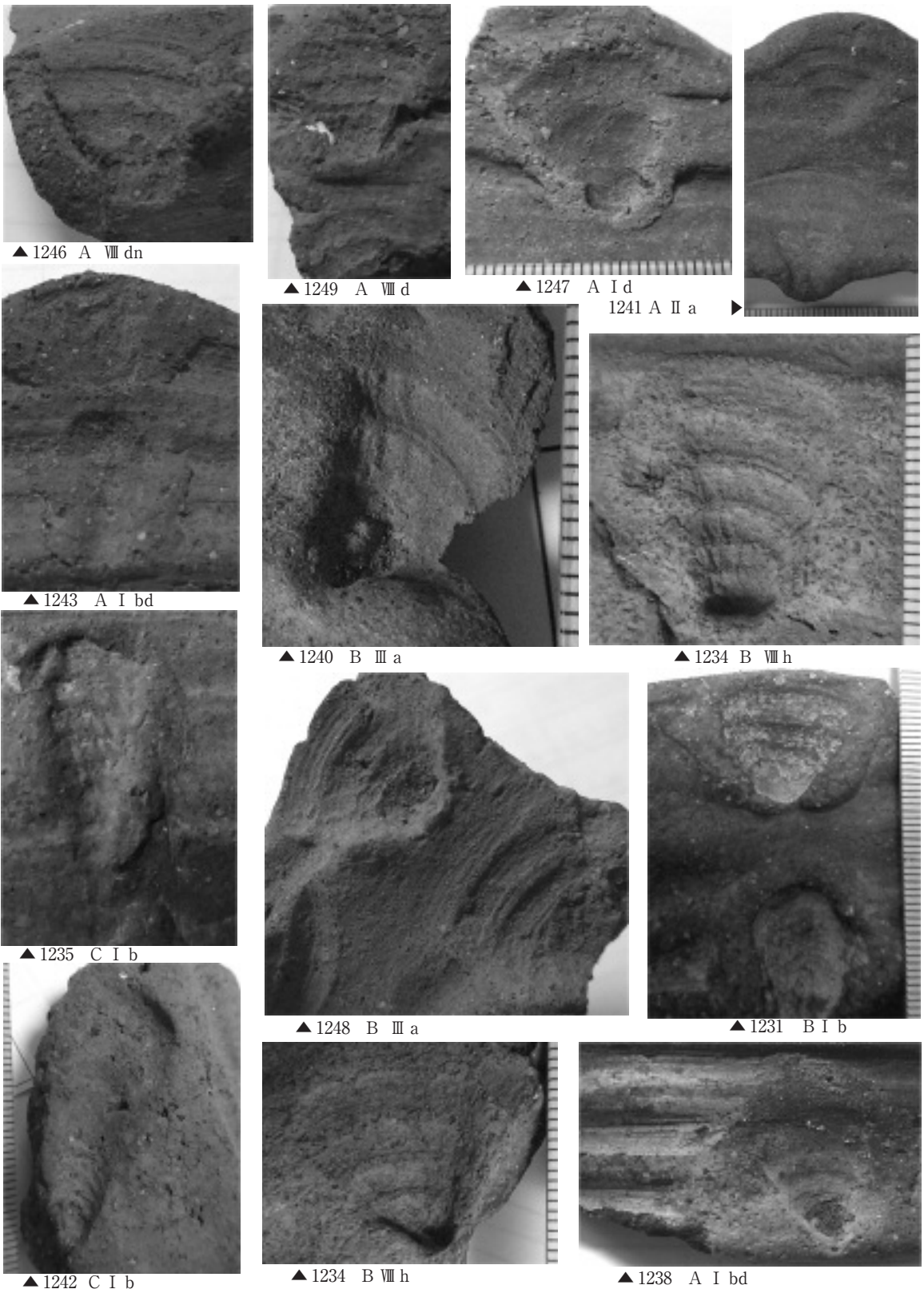


図1 宮滝遺跡出土の宮滝式土器の紋様 (数字は資料番号、A~Cは紋様の区分記号、ローマ数字は砂礫区分記号)

表2 宮滝遺跡出土の宮滝式土器展示品の観察一覧表

登録番号	報告書の図番号	紋様区分	砂礫の類型	砂礫の採取推定地	備考
1231	図29-11	B	I b類型	樫原付近	
1232	図28-7	C	I b類型	樫原付近	
1233	図30-2	C	II a類型	大川付近?	角閃石に柱状のものが多く
1234	図28-9	B	VIII h類型	宮滝付近	和田秀寿(1999)によるウミニナの紋様とされているもの
1235	図28-1	C	I b類型	樫原付近	
1238		A	I bd類型	沢付近	
1239			I bd類型	沢付近	
1240		B	III a類型	名張付近?	斑礫岩の碎片を混和
1241		A	II a類型	河内恩智付近	
1242		C	I b類型	花崗岩類分布地	
1243		A	I bd類型	沢付近	
1244			III a類型	名張付近?	斑礫岩の碎片を混和
1245		B	II a類型	河内恩智付近	
1246		A	VIII dn類型	宮滝付近	
1247		A	I d類型	花崗岩類分布地	
1248		B	III a類型	名張付近?	斑礫岩の碎片を混和
1249		A	VIII d類型	宮滝付近	
1250		A	III a類型	名張付近?	斑礫岩の碎片を混和
1252			I b類型	樫原付近	
1258			III a類型	名張付近?	赤色顔料が付着 斑礫岩の碎片を混和
1261A			II a類型	大川付近?	角閃石に柱状のものが多く 赤色顔料が付着
1261B			III a類型	名張付近?	斑礫岩の碎片を混和
1261C			III a類型	名張付近?	赤色顔料が付着 斑礫岩の碎片を混和

違いをもとに砂礫の採取地を推定すれば、I b類型の砂礫を含む四点の資料は樫原遺跡、I b d類型の砂礫の三点は樫原町沢付近、II a類型の二点は八尾市恩智付近、同類型で柱状角閃石の砂礫を含む二点は山添村大川遺跡付近の砂礫に似ている。III a類型の砂礫は名張付近の砂礫の可能性があり、赤色顔料が付着してい

るものがある。土器に含まれる砂礫の採取地が土器を製作した地とすれば、宮滝遺跡に土器を残した人は少なくとも5地点以上から来たことになる。また、これらの人々はニナのような貝殻で土器に紋様をつける風習をもっていた人々であるといえる。

五 おわりに

宮滝遺跡には縄文式土器だけではなく、弥生式土器や奈良時代の瓦も出土している。弥生式土器の砂礫を観察した時も今回の観察結果と同様に奈良盆地南半部の砂礫構成を示す土器が多く、宮滝付近の砂礫構成を示すものは殆どみられなかった。しかし、奈良時代の瓦は宮滝付近の砂礫と同様のものであった。縄文時代

晩期から弥生時代にかけて何の為に土器を持って宮滝の地に人々が来たのだろうか。

引用文献

末永雅雄一九四四『宮滝遺跡』桑名

文星堂

和田秀寿一九九九「宮滝式土器の再

検討」考古学雑誌第八四巻第二号

日本考古学会

松林苑と奈良時代の築地(上)

須藤好直

一 はじめに

平城宮北方で確認された松林苑^①は、禁苑や後苑として評価されている。その松林苑では、外郭西辺と平城宮北面大垣に接続する南西区画において築地が検出されている。わたたくしも松林苑の築地を調査する機会を得て以降、築地に関心を持ち、その歴史的意義についてまとめてみた^②と考えてみたものの、築地回廊や軒瓦編年などについて十分な理解を深めることができなかつたので、以下に若干の私見を述べ、大方の御批判を乞うことにしたい。

『国史大辞典』の「宮城」の項に、その名称の由来が諸宮に繞らされた

大垣によると記されているように、古代宮城制において大垣が重要な位置を占めていることはよく知られている。

ところで、松林苑の築地築造年代は出土遺物から奈良時代前半に比定することができ、我が国に於ける比較的早い時期の築地といえる。例えば大阪府新堂廃寺の築地築造時期も天平期に下ることが判明している^④。八木充氏は「第七次遣唐使の帰国報告が、藤原宮改修に、ついで平城宮造営に発展した」と考え、「竣工した平城宮の雄姿の報告」を第八次遣唐使の主要な使命の一つと見られている^⑤。黒崎直氏も平城宮大垣に築地

が採用された契機を、大宝二年（七〇二）に再開された遣唐使が目にした中国長安城の城壁と考えられている。⁶⁾このように平城遷都以前の築地資料を見つめることは難しい。そして、平城宮築地大垣が完成する時期は奈良時代当初ではなく、前半まで降る。そのため第七次遣唐使の帰朝時に、後に計画される平城宮造営に必要な新しい土木技術が果たして獲得できていたかは明らかではない。

このように評価の分かれる事柄の存在を前提にしたうえで、松林苑における築地の築造が平城宮造営と不可分の関係にあるのは自明であるので、井上薫氏と岩本次郎氏の平城宮造営に関する研究⁷⁾をもとに、奈良時代の築地について、検討することにした。

なお、昭和四一年（一九六六）に実施された重要文化財法隆寺西院大垣南面（南大門東方）修理工事に伴う地下調査において、仮柱柱穴が検出されているので、築地構築に関係する用語はこの修理工事報告書に準じることとする。⁸⁾

二 松林苑の築地

地境の竹藪や畑地に残る松林苑の外郭西面築地は、水田や道路などに

よって削平された平城宮築地大垣に比べて遺構の残存状態が良好である。築地は基壇上に築かれており、基壇は地山を削り出した部分と整地土による部分からなる。外郭西面築地では基壇の基底幅は二〇尺、上幅二二尺、高さ三尺を測る。築地の基底幅は、外郭西面築地が一〇尺、南区画築地が九尺で、築地の残存高は一mを測る。築地壁面は傷みが少なく、壁面が垂直気味に立ち上がる部分が多い。雨落痕跡は基底部から約四尺の位置に検出した。検出した遺構を平城宮跡の復原大垣に做って復原すると、基底幅約一〇尺の外郭西面築地の高さは一丈三尺となる。⁹⁾

発掘調査で検出された仮柱柱穴の間隔は、梁間が一・二尺、桁行が九ないし一〇尺である。仮柱柱穴の掘方は築地長軸方向に長い楕円形で、深さは一〜一尺五寸を測る。掘方の中に残る二基の柱抜き跡から仮柱柱の直径は五寸前後と推測できる。桁行寸法は幕板の長さに対応し、（梁間寸法）築地基底部幅―仮柱柱直径）+2×幕板厚+楔厚となる。

壁体は仮柱を設けて版築で築き、仮柱撤去後に、築地の外側にあたる西側では柱穴埋め戻し後に犬走りを整地するのに対して、内側では仮柱

柱穴を埋め戻すにとどまる。なお、仮柱の作業単位は確認できなかった。

外郭西面築地において出土した軒瓦¹⁾には、軒丸瓦6304A、6311Aa、6225C型式、軒平瓦663Ca、6664D・F・Ga・N、6685、6689Aa、6694A型式などがある。大半が第Ⅱ期前半までに属するが、軒平瓦6694A型式が「第Ⅱ期後半には出現」、軒丸瓦6225C型式が第Ⅱ期後半に出現の可能性を残しながら第Ⅲ期前半、軒平瓦6663Ca型式が第Ⅱ期後半の年代が与えられている。多数を占める軒瓦の第Ⅱ期前半に築地創建期の年代（養老五年〜天平五年（七二一〜七三三）頃）を求めて、少数の新しい軒瓦（第Ⅲ期前半）を平城遷都後に補修的に使用されたと推測できる。また、外郭西面築地西側で、築地崩壊土によって被覆された瓦検出面直上から出土した須恵器杯Bと土馬は、ともに奈良時代後半に比定できる。¹⁰⁾

このように大量の瓦が落下した築地の崩壊年代は、奈良時代末（長岡京期）までは下らない。そして、約六十余年を前後する期間、築地が存続していた、と推測できる。

三 平城宮と長岡宮の築地

平城宮 『続日本紀』靈龜元年（七一五）春正月甲申朔条の記事から朱雀門の完成時期が知られている。しかし、門完成時に築地大垣が築かれていたのかについては検討の余地が残る。北面大垣は掘立柱塀が築地基壇に改作されている。¹¹⁾東院南面大垣では、奈良時代前半に築かれた掘立柱塀が中頃には築地に改修されており、東院東面大垣の築造年代は、大垣の暗渠に使用された木樋の年輪年代測定から養老四年（七二〇）以降と推察されている。¹²⁾西面大垣と大垣に先行する掘立柱塀とは、和銅五年（七一五）〜天平十二年（七四〇）に「一時併存したらしい」。¹³⁾南面大垣東端の築造時期は、出土木簡から神龜年間まで降ると推測されている。このように、朱雀門脇を除いた平城宮築地大垣の築造年代が平城宮造営当初にまでは遡り得ないことがほぼ確定している。

南面大垣と東院東面大垣の基底幅は九尺で大垣には須柱を用いないことが判明しており、築地築造に伴う仮柱柱穴や雨落溝などが検出された。¹⁴⁾しかし、版築土の積み手の違いは報告されていない。

内裏や第二次大極殿院における掘

立柱建癖から築地廻廊への改作は平城遷都後と考えられている。また、天平一八・一九年頃の造営と考えられている朝堂院北面築地の須柱礎石の梁間は約五尺、内裏外郭南面築地廻廊の築地基底幅は六尺で須柱礎石が残る。

ところで第一次大極殿院の築地廻廊は、大極殿、後殿とともに和銅八年(七一五)には完成していたと考えられており、平城宮造営当初に築かれた築地の貴重な例である。築地は基壇上面が削平されており、北面廻廊以外の各廻廊で側柱礎石据付・抜取穴と足場穴が部分的に検出されている。しかし、築地築成に関わる仮柱穴は未検出であり、築地廻廊の根拠は、「棟通りに柱位置の痕跡がない」こととされている。この築地廻廊の完成時期は、降る余地がないのだろうか。²¹⁾

長岡宮 長岡宮跡では内裏南方官衙地区において基底幅七尺、残存高一・二mの築地が南北長六三mにわたって検出されており、國下多美樹氏は「宮城東面大垣」に比定された。²²⁾

この築地も基壇(「土塁」)上に築かれており、雨落ち痕跡は築地基底部から二尺二寸の位置に検出された。築地は、西壁がほぼ垂直に立ち

上がり、版築土には二〇尺間隔の作業単位(積み手の違い)が認められる。作業単位の境目で、築地の両側に仮柱列(「添柱列」)が検出されている。

(下)へつづく

註

(1) 松林苑は、確認以前からも平城宮関連施設として注意されていた(1奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告書Ⅱ』一九六二年五月、一一〇頁)。確認時の経緯は、2河上邦彦「松林苑の確認と調査」『奈良県観光』第二七七号一九七九年と3河上邦彦・今尾文昭ほか『松林苑跡』1、奈良県立橿原考古学研究所、一九九〇年三月、四〇―一頁に詳しい。確認後の研究に、4岸俊男「松林苑と年中行事」『奈良県観光』第二七七号一九七九年、5佐藤信「京内庭園遺構と松林苑」『國文學 解釈と教材の研究』第二七卷五号、一九八二年四月、6河上邦彦「松林苑の諸問題」『橿原考古学研究所論集』第六、吉川弘文館、一九八四年、7金子裕之「宮と後苑」『瓦衣千年―森郁夫先生還暦記念論文集―』一九九一年一月、8金子裕之「宮廷と苑地」『文化財論叢』Ⅲ、奈良文化財研究所、二〇〇二年、などがある。

(2) 外郭西面築地(①第二次調査(前掲註一文獻3、一七―二〇、七四―九二頁)・④第六次調査(佐々木好直ほか「平城宮松林苑発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報』一九八一年度(第二分冊)、奈良県立橿原考古学研究所、一九八三年三月、二六七―二八六頁)・⑤第九次調査(佐々木好直ほか「平城宮松林苑発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報』一九八二年度(第二分冊)、奈良県立橿原考古学研究所、一九八三年三月、三五―三五三、三五五―三五五頁)・南西区画北面築地(南面築地)(③第一二二―一二二次調査(1奈良国立文化財研究所「北方築地の調査(第一二二―一二二次)」『昭和五年度平城宮跡発掘調査概報』一九八一年四月、二六・二七頁。2金子裕之ほか「平城宮北辺地域発掘調査報告書」奈良国立文化財研究所、一九八一年三月)・②第四次調査(前掲註(1)文獻3、二一―二五、七四―九二頁)・⑦第五次調査(土橋理子ほか「松林苑跡第五〇―五五次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』一九九五年度(第一分冊)一九九六年三月、八―一三頁)・南西区画東面築地(⑥第四次調査(清水康二ほか「松林苑跡第四〇次・第四次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』一九九三年度(第一分冊)、一九九四年三月、一―五頁)。

冊)、一九九四年三月、一―五頁)などがある(丸数字は調査順)。
(3) 福山敏男「きゅうじょう宮城(一)」『国史大辞典』第四卷、吉川弘文館、一九八三年二月、二二六頁。
(4) 栗田薫「新堂廃寺跡」『新堂廃寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お亀石古墳』富田田市教育委員会、二〇〇三年三月、三八―四〇頁。
(5) 八木充「古代日本の都」講談社、一九七四年五月、一二三―一二八頁。遣唐使の次数は、森克己『遣唐使』至文堂、一九六六年、二五―二七頁に拠る。大宝度の遣唐使を第七次、養老度の遣唐使を第八次と数える。
(6) 黒崎直「掘立柱癖と築地癖」『立命館大学考古学論集』Ⅰ、同刊行会、一九九七年二月、三三四頁。
(7) 井上薫「造宮省と造京司」『日本古代の政治と宗教』吉川弘文館、一九六一年七月。岩本次郎「平城京の造宮経過について」『大和文化研究』第八卷第一号、大和文化研究会、一九六三年一月。
(8) 西條孝之・林義久・木田光昭ほか『重要文化財法隆寺西院大垣南面(南大門東方) 修理工事報告書』奈良県文化財保存事務所、一九七四年六月、一八―二二頁。
(9) 幕板が発掘調査報告書の堰板、仮

枘柱が同じく添柱・支柱などの表記に対応する。

(10) 築地壁体は垂直気味に立ち上がるが、高さ一丈三尺で一尺内傾する(片側の壁面では、下幅九尺一上幅七尺二尺+2)。傾斜比は高さ一・三mで〇・一m内傾し、垂直ではないが垂直気味といえる。また、築地基底部から軒先までの距離は、軒の出四尺五分から内側に入った一尺分を差し引いた三尺五分となり、発掘調査で検出した雨落ち痕跡の位置にはほぼ合致する。

(11) 平城宮軒瓦の型式と編年は、1毛利光俊彦・花谷浩「第IV章考察1屋瓦」『平城宮調査報告』XII、奈良国立文化財研究所、一九九一年三月、二五一～三六九頁。2佐川正敏「第V章1屋瓦」『平城宮調査報告』XIV、奈良国立文化財研究所、一九九三年三月、九六～一二九頁。3奈良国立文化財研究所『平城宮・藤原京出土軒瓦型式一覽』一九九六年六月、による。

(12) 須恵器杯Bの残存率は三割で、口径一〇・〇cm、器高三・六cmを測る。低い高台が底部外側に付き、平城宮SK219出土土器と同類であり、奈良時代後半に属する。土馬は前左足と同右脚裾部・尾・面繫を欠く。頭部側面に粘土を貼り付けて手綱を表現する。後両脚は、胴部から5m離れて出土し

た接合資料で、残高一三・五cmの裸馬である。長岡京期の土馬(長岡京左京六・七条三坊自然河川SD285)の高さ(面繫を外した)が九・五～一二・五cmであるのに比べるとひとまわり大きい。また、奈良時代前半の土馬(平城京左京四条四坊九坪SK2412)

に比べると、鬣の表現が省略され、手綱の表現も簡略化されており、大きさもひとまわり小さい。奈良時代中頃の土馬(前川遺跡井戸2)と比べると、大きさはほぼ同じであるが、鞍の表現が省略されていて、より後出的である。以上から、土馬の年代は、奈良時代後半に比定でき、須恵器杯Bの年代とも矛盾しない。

(13) 伊東太作「第三章2遺構各節」『平城宮発掘調査報告』IX、奈良国立文化財研究所、一九七八年三月、三二頁。

(14) 平城宮跡発掘調査部『平城宮・平城京跡の発掘調査』奈良国立文化財研究所年報1994、一九九四年一〇月、一七～一九頁。

(15) 西山和宏「第V章考察1遺構変遷」『平城宮発掘調査報告』XV、奈良国立文化財研究所、二〇〇三年三月、一六三頁。

(16) 山本忠尚「第V章考察1馬寮地域の変遷」『平城宮発掘調査報告』XII、奈良国立文化財研究所、一九八五年三月、一三三頁。

(17) 南面大垣SA12000の仮枘柱穴の南北心々距離は一尺を測る(1平城宮跡発掘調査部『平城宮跡・平城京跡の発掘調査』奈良国立文化財研究所年報1982、一九八二年一月、三五頁。2玉田芳英「第三章朱雀門跡の発掘調査2発掘遺構」『平城宮朱雀門の復原的研究』奈良国立文化財研究所、一九九四年三月、二五・二六頁)。

(18) 報告書掲載遺構図から確認することができる築地の築造年代は、何れも平城遷都後である(兵部省南面築地SA12400、内裏外郭南面築地回廊SC640、朝堂院北面築地回廊SA103)。兵部省南面築地の基底幅は八尺を測る。天平一七年(七四五)の遷都後の年代が考えられているが、遡る可能性も指摘されている(1宮本長二郎「第VI章考察3遺跡A内裏殿舎遺構の時期区分」『平城宮発掘調査報告』XII、奈良国立文化財研究所、一九九一年三月、三九七頁。2橋本義則「第VI章考察3遺跡C内裏地区空間構造の歴史の変遷」『同前掲文献』、四四七頁。3上野邦一「第V章考察2遺構変遷」『平城宮発掘調査報告』XIV、奈良国立文化財研究所、一九九三年五月、一三〇～一三五頁)。

(19) I期南面築地回廊西半のSC7820・同東半のSC5600、同西面築地回廊SC13400・同東面築地回廊SC5500・同北面築地回廊SC8098(1宮本長二郎・中村雅治・亀井伸雄・清水真一「第三章遺跡2遺構」『平城宮発掘調査報告』XI、奈良国立文化財研究所、一九八二年一月、三六～五〇頁。2金井健・大林潤「第三章遺跡3検出遺構」『平城宮発掘調査報告』XII、奈良国立文化財研究所、二〇〇一年三月、六一・六四・六六頁)。

(20) 岡田英男・宮本長二郎・亀井伸雄・清水真一・山岸常人「第V章考察3建築遺構の復原」『前掲註(19)文献1、二三七頁。』

(21) I-3期に、大極殿を解体し、東面・西面築地回廊を撤去して新たに東面と西面に掘立柱塀を建てたと考察されている(前掲註(20)、二二六頁)。

しかし、「再び第一次大極殿院の周辺において整備がおこなわれはじめた可能性がある」(山本崇「第V章考察2史料からみた第一次大極殿院地区」『前掲註(19)文献2、二六三頁』養老年間(七一七～七二四)の後半に、楼閣の建設とともに掘立柱塀が築地回廊に改修された可能性はないのだろうか。このように考えたのは、一つにはI-2期の東西楼南側柱に朝堂院区画塀の柱筋が揃うこと、二つにはI-4期が天平一七年(七四五)の遷都後から西

面築地回廊SC13400・同東面築地回廊SC5500・同北面築地回廊SC8098(1宮本長二郎・中村雅治・亀井伸雄・清水真一「第三章遺跡2遺構」『平城宮発掘調査報告』XI、奈良国立文化財研究所、一九八二年一月、三六～五〇頁。2金井健・大林潤「第三章遺跡3検出遺構」『平城宮発掘調査報告』XII、奈良国立文化財研究所、二〇〇一年三月、六一・六四・六六頁)。

楼や南面築地回廊が解体される天平勝寶五年(七五三)までの時期に比定されており、掘立柱塼の撤去後に暗渠(築地)が築かれた(大林潤「第V章考察1 遺構変遷と地形復原」前掲註(19)文献2、二三五頁)前後関係をI-1・2期での出来事と考える余地がないかと想定したからである。

(22) 國下多美樹『長岡京の歴史考古学研究』吉川弘文館、二〇一五年一月、八七頁。この築地を宮城内の区画と見なし、外郭がひとまわり大きいとすれば、長岡宮大垣の基底幅は八尺であったのかもしれない。

(23) 山中章『向日市埋蔵文化財調査報告書』第9集、向日市教育委員会、一九八三年三月、一四〜一九頁。東西仮柵柱列の距離は二・三mを測る。

研究会

いのししの会

平成二九年一月八日(日)に檀原考古学研究所講堂にて、新年はじめの研究会会として、特別指導研究員の田島公先生(東京大学史料編纂所教授)より、「十卷本『伊呂波字類抄』の写本研究の進展と考古学」『校刊美術史料』寺院篇上巻「伊呂波字類抄抄」の問題点」と題しまして、



研究会後の集合写真(講堂前にて)

御講演頂きました。古代寺院や陵墓の検討を行うには、古代や近世の文献だけでなく、「伊呂波字類抄抄」の各写本にある文書などの中世文書も精査の必要があるとの御指摘を頂きました。

海外交流

国際シンポジウム

「ユーラシアからの

まなざし」

平成二九年一月一四日(土)、奈良県社会福祉総合センター大ホールにて、中国西北大学文化遺産学院陳洪海院長、王建新教授、冉万里教授、寧夏文物考古研究所馬曉玲副研究員、慶應義塾大学言語文化研究所青木健先生、檀原考古学研究所菅谷文則所長による講演会とシンポジウムを開催しました。

海外研修員

派遣

中野 咲主任研究員が、韓国国立文化財研究所での平成二八年一〇月三日〜一二月九日までの研修を終了致しました。

岡見紀主任技師が、中国西北大学へ派遣され、平成二八年一月一七日から研修を開始致しました。

受人

韓国羅州文化財研究所の李志映学芸研究士が、平成二九年一月一日から、檀原考古学研究所での研修を開始致しました。

附属博物館

展示案内

特別陳列

「ヤマトの戦士

―古墳時代の武器・武具―」

▼会期

平成二九年二月四日(土)

〜平成二九年三月二〇日(月・祝)

特別陳列

「さわって体感考古学!!」

▼会期

平成二九年二月四日(土)

〜平成二九年三月二〇日(月・祝)